

第2章 イスラーム教下のイエメン — イスラーム初期におけるイエメン —

神の使徒（彼に祝福と平安を）が遣わされた折に、イエメンはペルシャの支配に従順であったが、もしそれを支配だと言うとしても、それは完全なものではなく、イエメン全体に行き渡ったものでもなかった。事実それはサヌアーとその周辺の地域、幾つかの商業港や大きな都市に限られていた。

その他の地方や町においては、権威と勢力は族長や指導者等、イエメンの支配者達の下にあり、彼ら各々はサヌアーの政府の支配が及ばないことにより、地方勢力を謳歌していた。

イスラーム暦6年ズルヒッジャ月に、メッカのクライシュ族との間で結んだフダイビーヤ協定から使徒が戻ったとき、彼は、彼の使者及び書簡を、アラブ諸地域の様々な王達、諸部族に向けて、またペルシャとローマの2人の王に向けて送った。

（訳者注） 西暦628年3月13日メッカへの小巡礼を行えと啓示を受け、1500人も引き連れていたために、メッカ側が敵対行為と見做し攻撃すると威嚇した。そこでフダイビーヤにおいて（1）10年間の敵意の放棄（2）ムハンマドの元に来たメッカ人の送還（3）同盟の自由（4）翌年のメッカ巡礼の保証等が取り決められた。

聖なる使徒が布教の呼び掛けを送ったアラブの諸国の1つがイエメンであった。そこへ彼はヘジラ暦7年ムハッラム月に数多くの使者を遣わした。そして聖なる使徒がイエメンに送った最初の書簡は、当時のヒムヤル人の主首達、アブドカッラール・アルヒムヤルの息子達であるアルヌウマーン、アルハーリス、ナイーム、アリーブ並びにマルーフに宛てたものであった。彼らは当時ズィー・アビーンに住んでいた。（注1）

（注1） Dr. ムハンマド・アミーン・サーリフ「イエメン・イスラーム史」P. 41

彼らは自分達をライーンそしてマアーフィル、ハムダーンの首長たちであると称していた。この呼称から、彼らは当時のイエメンでは突出した首長達であった様である。しかしながらアルヌウマーン自身は、その当時イッブ地方のバアダーン山にあるホップ城砦に住んでいた。（注2）

（注2） Dr. イサーム・アッディーン・アブド・アッルーフ・アルファキー「イスラーム教下のイエメン」P. 16

種々の物語は以下のことを述べている。彼はエチオピア、ジーラウ、バルバル島及びそれ以外の国々から徴税していた。そして彼の元に送られた使者アルムハージル・ブン・ウマイヤー・アルマハズミーに聖なる使徒は、彼が布教を行う人々の内、最初の者として、これらのヒムヤルの首長達に布教する事、そして彼らに「信仰に背いた（啓典の）民も、ああして離れて行きはしなかったのか」（第98章「神兆」）と言う章句を読むこと、そして以下の事が書かれている書簡を彼らに手渡すことを命じていた。即ち「あなた方は平安になるであろう、アッラーと彼の使徒を信ずるならば。そしてアッラーこそは唯一のものであり、彼に並び立つ者は無い。彼は奇跡と共にモーゼを遣わし、またその言葉と共にイエスを創造した。それでユダヤ人達は自らを、アッラーの息子で敬愛される者であると言い、キリスト教徒達は、アッラーが3つのペルソナの内、第3番目の位相であり、イエスはアッラーの息子であると言ったのだ」。

ムハンマドはイエメンの諸部族の中でどの部族にも先んじて、ヒムヤル首長国に関心を示したが、それは彼らが強大な権力の持ち主だったからであった。即ち当時のイエメンにおいて、同盟を結ぶ相手として妥当な政権である、と考慮してのことであった。

同じくムハンマドはナジュラーンのキリスト教司祭達や、ハドラマウトのキングダ族のムアーウィーヤ家、更にやはりハドラマウト地方のヒムヤル族のラビーア・ブン・アルムラーヒブ家にも書状を送り、イスラームに帰依するように彼らに呼び掛けた。

最初のイエメン人達の到着

ヘジラ暦 9 年か 10 年に、ムハンマドの元にイエメン人使節団及びイエメン人の使者達が到着し、彼らのイスラームへの改宗の意、更に彼らを通じてイエメン人達のイスラームへの改宗の意を表明した。彼らの内には、ザルワ・ブン・アーミル・ブン・サイフ・ブン・ジー・ヤジーンの使者がいたが、彼はマーリク・ブン・マッラ・アルラハーウィーと言ひ、ムハンマドの元に前述のザルワ・ブン・アーミルの書簡をもたらした人物であった。その書簡において、使徒に対して、彼のイスラームへの改宗とイエメンの諸部族長のイスラームへの改宗が表明された。(書簡には、前述のアルハーリス・ブン・アブドカッラールとその兄弟達へと記され、彼らが多神教及びその信者達と袂を分けたことが使徒に伝えられている)

これの補足説明としてアルハズラジー (注 3) がこう述べている。「アッラーの使徒は彼らへの書簡の中でこう申されている。

(注 3) 「[鑄造された黄金](#)」 P.13

「慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において。アッラーの使徒であるムハンマドが以下の 3 名の者にこの手紙を送る。ライーンそしてマアーフイル、ハムダーンの所有者であるアルハーリス・ブン・アブドカッラール、ナイーム・ブン・アブドカッラールそしてアルヌウマーン (注 4) へ、

(注 4) この事は当時、ハムダーンに対するヒムヤル人達の強い影響力の現われによるものか、或いはヒムヤルとハムダーンの二大連合勢力の形成の現われに依るもので、その結果ヒムヤル人に対してこうした栄誉が与えられることになったものと言える。

我は、御自身よりほかに他の神はいないアッラーを褒め称える者である。ローマ人達の地 (訳者注) から我らが戻ってみると、汝らの使者が我等の所に一足先に来ていたので、我等は汝らの使者とメディナの地で会った。汝らが託したメッセージと、汝らが進むべき道の方向とを我等に示した。更に汝らの使者は、汝らの我等に対する服従の近い (イスラームへの改宗) の他に、多神教徒等を汝らが殺害したと言う知らせを我等の元にもたらした。

(訳者注) 預言者はローマ人達の地に足を踏み入れた歴史的事実はないと思われるので、ムハンマドが送った使者のことか？

これらのこと全て、まさしくアッラーが汝らを正しき道に導かれたこと。更に、もし汝らが善行を為し、アッラーとその使徒に従ひ、礼拝を執り行ひ、「ザカート (喜捨)」を差し出し、更に戦いで汝らを得た戦利品の内、預言者への献納分と最良の品々を差し出すことの他、イスラーム教徒等に対して聖典に記されている様にサダカ (慈善) として、汝らの所有する不動産の内、泉から灌漑された土地と降雨によって灌漑される土地の各々 10 分の 1、泉の湧き出ぬ土地 (ガラブ、遠方の地の意味か?) に関しては 20 分の 1 約束すること。

(訳者注) : 「ザカート」イスラームの五行の第 4 番目にあたる義務行為。各人の収入と資産に掛けられる救貧税。金銭の場合には最低 2.5%、穀物と果物は出来高の 5-10%、家畜はテキストにこれから述べるように特別な算定方法がある。「サダカ」ザカート以外の慈善行為を指す。広義には援助を必要とする者に与えられる全てを指し、金銭や物に限られない。

駱駝 40 頭につき牝の子 (3 才になろうとする駱駝) を 1 頭、駱駝 30 頭ならば牝の子駱駝を 1 頭、駱駝 5 頭分については羊 1 頭、つまり駱駝 10 頭なら牝の羊を 2 頭、牛 40 頭につき牝牛を 1 頭、牛 30 頭ならば子牛か 2、3 才位の子牛のどちらかを 1 頭、羊 40 頭分については家畜としている牝の羊 1 頭を差し出すこと。これらの事はイスラーム教徒にアッラーがサダカとして課された努めであるぞ。これらを約束すれば、後はサダカを除いた分に恵みが加われば、それはその者のものとなる。そしてこの様に正しく執り行ひ、そしてその者の恭順 (服従の誓い・イスラーム) を表明し、また多神教徒よりもイスラーム教徒を助けた者、即ちこうしたことを行つた者は、最早立派なイスラーム教徒。他のイスラーム教徒が所有する権利を有し、他のイスラーム教徒に課せられた努めは、自分自身に課せられた努め、と言う次第。それを果たせばアッラーとその使徒の庇護をその者は受ける。ところでユダヤ教徒とキリスト教徒はサダカを求められることはない。その代わりジズヤ (人頭税) を課される。

(訳者注) 「ジズヤ」啓典の民がイスラーム教徒の庇護 (ズィンマ) を得る際に支払う人頭税を指す。

この他成人に達した男女は、自由人でもただの奴隷でも、ムアーフィル地方の通貨でディナールを払うか衣服を差し出すことになる。こうした事柄をアッラーの使徒の元へ正しく導いた者は、アッラーとその使徒の庇護を受ける。こうした事を執り行わぬなら、その者はアッラーと使徒の敵になる。

さてアッラーの使徒である預言者ムハンマドは、ザルア・ジー・ヤズンの元へ、もし私の使者達がお前達の所に出向いた折には彼らをどうか宜しく願う、との言葉と共にムアーズ・ブン・ジャバルとアブドッラー・ブン・ザイドとマーリック・ブン・イバードとウクバ・ブン・ナムルとマーリック・ブン・マラーラと彼らの同胞達を送った。そしてまたお前達の地方のサダカの中からお前達の元にある物を集めて、それを私に差し出すように。またお前達に命ずる者はムアーズ・ブン・ジャバルであり、彼は満足することなくば、帰らぬであろう。[cf. 彼の言葉が人々に受け入れられ、その結果彼は満足することになるだろう]

さてムハンマドは、「アッラーの他に神は無し、彼はアッラーの僕であり、アッラーの使徒である」とシャハーダ（宣誓）をした。そしてマーリック・ブン・マッラ・ブン・ラハーウィは私（使徒）に次ぎの様な事があつたと語った。「お前（ザルア・ブン・アーミル）はイスラーム教徒になった最初のヒムヤルの者だ。そして多神教とを殺した」と。その事を私は喜んでいる。私はお前に命じる、ヒムヤルにおいて全て上手くやるように。そして裏切るな。離反するな。神の使者、彼こそはお前達の富と貧困の支配者なのである。またサダカはムハンマドやその家族の為にあるものではない。サダカとは即ち、ザカートのことであり、それによってイスラーム教徒やイスラーム教の道に入る子に喜捨をすることである。マーリックはイスラームに関する情報に卓越している。そしてイスラームの真髄を暗記している。彼に対して善くある様に命ずるのである。彼は人々に注目されるであろう。汝達に平安と神の慈悲と祝福があらんことを」とアルハズラジーは伝えている。

聖なる使徒がイエメンに送り出した使者達は以下の者である。ムアーズ・ブン・ジャバル（彼はアンサール、支援者である良き若者の中の一人である）とアブドッラー・ブン・ザイドとマーリック・ブン・イバードとウクバ・ブン・ナムルとマーリック・ブン・マラーラであった。この最初の人物（ムアーズ）は集団の長として、人々を教育し、イスラーム法を教えるために、そしてイスラーム教徒からはザカートを、ユダヤ人やキリスト教徒からはジズヤ（人頭税）を集めるために送られた。そして聖なる預言者はムアーズに2通の手紙を託した。その中の1通はアブドゥルカッラールの一族へのものであつた。使徒は其中で、彼らをイエメンにおいて彼らの影響力を保持したままその地位を安堵し、彼らにイスラームによる統治を実行する様に要求した。もう1通は、ザルア・ブン・アーミル・ブン・ズィ・ヤズンへのもので、其中で彼はイエメンに送った使節達、彼らは前述したムアーズ・ブン・ジャバルと彼のグループであるが、彼らを宜しく頼むと、前述した書簡の中で述べている。

また次の様に伝えられている。聖なる預言者はムアーズに彼をイエメンに派遣した折にこう言った。「ムアーズよ、お前は何によって判断するのか？」するとムアーズは言った。「クルアーンによって」。すると預言者は彼に言った「もしそれが見つからなかったらどうする？」と言った。「ムハンマドのスナ（推奨行為）によって」また預言者は言った「それが見つからないときは？」それに対してムアーズは言った。「私の意見のイジュティハードによって」（訳者注）

（訳者注）「イジュティハード」学的努力。クルアーンとスナに依拠して、独自の意見でイスラームに関する諸問題に判断を下す論理的推論を意味する。尚、他に下記のものがある。

「キヤース」：類推。クルアーンとスナに依拠して、法律規定を導き出すこと。既知の類似の条文から、論理的類推により裁定を行うこと。

「イジュマール」合意。「イスラーム共同体は過ちについて意見の一致をみることはない」と言うハディース（ムハンマドの言行録）を論拠に、権威ある学者達の総合意見が、大衆に受け入れられる際には法的な論拠となることを指す。

「アルハムド リッラー（神を讃えよ）、神の使徒であるムハンマドの使者の彼に、神は正しき道において成功を賜った。」そして彼に神への畏敬の念を持ち、誠実を遂行し、裏切りから惨めな人々貧者の立場を守るように命じた。そして未亡人に対しては善行なる夫であれ、孤児に対しては慈悲深い父であれ、と助言した。またイスラーム教徒以外の人々にイスラームの善行を教えるよう命じた。そして善行を為し、忌み嫌われることをするなと命じた。試練に耐えろ。アッラーに対する誹謗者の非難が、彼（ムアーズ）を捉えることのないよう、諸事を容易にし難しくするな。そして人に良い知らせをもたらせ。そして人々の楽しみを奪うな、と命じた。（注5）

(注5) 「イスラーム教下のイエメン」 P.29

また使徒がムアーズに言った事の中にはこの様なことがあった。「私はお前を心の優しい人々の元へ送った。しかしお前の杖で従う者達に対しては戦わねばならない。もしも人々の元へ行ったならば、お前の正しさ、優しさ、許し、寛大さでイスラームを飾りなさい」多分ムアーズの統治はイエメン全域に行われた。その証拠にこんな事があった。

彼が視察の為にイエメンの何人かの代官に会うと、彼はイスラームに背いた男を彼に示した。そこでムアーズは彼に信仰に戻るように言ったが、彼は悔い改めなかったため、彼の首を討つことを命じた。彼が鞍の上から降りてくる前に（首は）討たれた。

またムアーズがマディーナからイエメンの最初の入口であるサアダに着いた時、彼（ムアーズ）はその地の人々にモスクの建設を命じた。そして彼らに別れを告げ、サヌアーに向かった。そしてサヌアーに着いた時、人々を集めて神の書簡について述べた。サヌアーを旅立つ前には、バーザン庭園に大モスクを建立することを命じた。それは有名なモスクである。（そのモスクでは、何回かの増築が行われた事が知られている。その中にはアルワリード・ブン・アブドルマリクの増築、ムハンマド・ブン・ヤアフィル・アルハワーライの増築、また女王アルワー・ビント・アハマド・アッスライヒーの東側の増築がある。これらについては各章において後述する）

そしてムアーズはジュマダー・アルウーラー月（イスラーム暦第5月）或いはラジャブ（同7月）の下旬にジュンドに到着し、そこで有名なモスクを建立した。（但しこれは増築が行われる前のものである）それを完成した後、彼はそこで集団礼拝を行った。それはたまたまラジャブ月の最初の金曜日であった。人々は喜び神がイスラームに依って彼らを強くし、不信心や多神教から解放してくれたことを喜んだ。そこでイエメンの人々は毎年ラジャブ月の最初の金曜日を彼らの祝いの日とした。ラジャブ月の第一金曜日に祈りとその記念の為に、人々はジュンドの大モスクにやってくるのを習慣としている。

ハムダーン地方のパキール（もしくはブカイル）族（注6）がイエメンの部族として初めてイスラームへの改宗を宣言した。それは神の使徒がヘジラの前にメッカに居た折のことであった。神の使徒はアルマジャンナやウカーズやズー・アルマジャーズ諸市場が催される季節に、そこにやって来たアラブの諸部族を前にして、彼の神のメッセージを彼らの元に伝えるまで、彼のことを邪魔しないようにと呼び掛けた。

(注6) 「イエメン・イスラーム史」 P.42

スフヤーン・ブン・アリヤーン・ブン・アルハブの一族のカイス・ブン・アーリク・ブン・サアド・ブン・ルウイは聖なる預言者に言った。「私は貴方を信じる為に、そして援助する為にやって来たのです。」

聖なる預言者は言った。「ようこそ、ハムダーンの若者よ！貴方達は私の心の中に有るものと共に、私を連れて行くか？」

彼は言った。「はい。私の父と貴方とそして私の母と共に。」

使徒は言った。「貴方の部族の所に行け。そして彼らが（イスラームに改宗）したならば、戻ってきなさい。そうすれば私が貴方と共にいこう。」

カイスは彼の部族の元に戻り、彼らは改宗した。そして使徒の所へ帰って来て言った。「私の部族は既に改宗し、私に貴方を連れてくるように命じました。」

使徒は言った。「善き事かな。部族の使者カイスよ。貴方は神と貴方との約束を履行した。」

そして彼の前髪を撫でた。使徒は彼の部族ハムダーンのヒムヤル人達とアラブ人達そしてその混血の者達、そして支配者達に対して次のような契約書を書いた。即ち、彼に対して耳を傾け従えば、神と彼の使徒の庇護が彼らにあり、礼拝と喜捨を行えばその者達に対しては300フィルカ（量単位に用いられる容器か？）が与えられる。またハヤワーン（部族名か地域名か？）から200フィルカの干し葡萄と玉葱を半々（即ち100フィルカづつ）、アムラーン（地域名）からは100フィルカが神の財から永遠に安堵されることになる。それから聖なる使徒は神から彼に下された啓示に

よりメディーナに聖遷した。

メディーナに聖遷した後、身分の高い者を含むハムダーンの使節団が来訪した。彼らは150人の者達から成り、中にはズー・アルミシュアル・アブー・サウル・マーリク・ブン・サムトやマーリク・ブン・アイファウそしてウメイラ・マーリク・アルハールフィー等がおり、彼らはハーリフ、ヤーム、シャケルの各地方でイスラームを広めることを確約した。それにより使徒は彼らの土地と収穫物を安堵した。

この使節団の来訪は、アッラーの使徒がタブークより戻った折のことであった。そして彼らには木綿で出来た「ヒブラ」と呼ばれるイエメン製の布地の服、そしてアデン製のターバンをマハル地方とアルハブ地方の名馬と鞍と共に与えた。

マーリク・ブン・ナムトはアッラーの使徒の前に立ち、次ぎの様に言った。「アッラーの使徒よ、町に住む者も砂漠に住むベドゥインも、ハムダーンの身分の高い者達も、アッラーに対する誹謗者の非難が彼らを捉えることのないように。彼らはハーリフ、ヤーム、シャケルの各地方から、イスラームと言う紐で繋がれた足の早い牝駱駝に乗って、貴方のところにやって来た駱駝と馬の民達なのです。彼らは使徒の呼び掛けに応じて、偶像の神と離別し、彼らの契約は反故にされる事はありません。それはラアラア山が何も成し得ず、褐色の肌のガゼルが（優美さを忘れ）粗野に荒々しく走る等という事が無いのと同様に」

これに対して聖なる使徒は「善き事かなハムダーンの地域は。支援と勝利に何と迅速に近づき、努力することにおいて何と忍耐強いことであろうか。彼らの中から支配者が出て、彼らの中にイスラームの指導者がいることになろう」と言った。

それから（神の使徒は）、彼ら（ハムダーンの代表者達）に書簡の中で次ぎの様に書いている。

「慈悲深き、慈愛あまねきアッラーの御名のもとに。神の使徒であるムハンマドからの書簡をハーリフ地方へ、そして高原であるハーリフと砂のうねりを起こす人々に宛、その代表であるズー・アルミシュアル・アブー・サウル・マーリク・ブン・サムトと彼の部族の内、イスラーム教徒になった者に対して送るものである。

もし彼らが（ハーリフの土地の）高所や低所そしてその周辺の地を所有し、（その土地の）草木で稼ぎ、（その他の土地の）干し草で牧畜を行う場合には、我々の取り分として、彼らから干し草とナツメヤシの木の一部を（受け取る）と言う条件を付ける。

また信任と信頼を与えられた者には、彼らはサダカの中から役に立たない駱駝や年老いた牝駱駝、子駱駝、年老いた駱駝や乳を提供する駱駝や赤い色の雄羊を所有する権利を有する。だが彼らの義務として、年老いた牛や山羊と5歳の馬を（我々の取り分として差し出さなければ成らない）。

礼拝を行い、ザカートを与えた者は、彼らはその事に依って神の契約と神の使徒（彼の上に平安あれ）の保護があるだろう。そしてムハンマドの教友であるムハージル（メッカからの移住者）とアンサール（メディーナで支援した者が彼らを見守らんことを）」

それから聖なる使徒は、「別れの巡礼」の後にアリー・ブン・アリー・ターリブ（正統カリフ第4代）をバルダ・アルアルスミーとアルバラウ・ブン・アーズブと共にイエメンに送った。アリー・ブン・アリー・ターリブはサヌアーに到着し、ハムダーンの代表者達を召喚した。彼の元へ（代表者達の幾つかの）集団がやって来た。そして彼らに対してムハンマドの書簡を読み上げた。そして彼らはイスラーム教徒になった。

そこで彼はその事を知らせるために、神の使徒の元に書簡を送った。その時彼は神に対して感謝の礼拝をしたと伝えられている。彼は「ハムダーンに平安あれ」と3度言った。そしてアリーはその後、彼らの代表と共に使徒の元に向かい、使徒は「別れの巡礼」を遂行した。

ヘジュラ暦10年、「使節団の年」（注9）として知られるのだが、イエメンやその他の国の使節団がメディーナへ相次いで到来した。そして使節団のイスラームへの改宗を宣言し、神の使徒の元から戻って行った。

その使節団にはムハンマドの教友のうち、指導者達や教授達が同伴していた。それらは彼らが人々にイスラームの知識を教え、人々に宗教の諸事について導き教える為であった。彼らは金持ちからザカートを徴収し、それを法的な会計

の下で使った。使節団の中では、イエメンの使節団が最も数が多かった。それはイエメンの部族の数が多かった事と、聖なる使徒の時代にイエメン人達が全て改宗したからである。

そのイエメン使節団には、リムア地方とティハーマ地方のアルアシュアリー族の代表がいた。その中にアブー・ムーサー・アルアシュアリーと彼の兄弟アブー・バルダとアブー・ラハムがいた。彼らの使節団はヘジラ暦10年に神の使徒に出会った。それは使徒がハイバルに居たときで、彼は戦利品の分配にやって来た者達の中で、彼らには戦利品を割り当てたが、他の戦いに参加しなかった者達には割り当てなかった。

そして聖なる使徒はアシュアリー族の使節団が到着した時、教友たちに話し掛けながらこう言った。「イエメンの人達がお前達のところにやって来た。彼らは最も穏やかな心、最も優しい魂、正しい信仰心、そして正しい教訓を持っている」

数多くの使節団の中には、マーリク・ブン・マラーラ・アッラハーウィー率いるヒムヤルの人達から成る一行が含まれていた。前述した様に彼らはザラア・ブン・アーミル・ブン・サイフ・ブン・ズィー・ヤズンとヒムヤルの他の族長等に命じられた使節としてヘジラ暦9年にメディーナにやって来たのだった。

この他マラードの使節団もファルワ・ブン・マスフィーク・アルムラーディが先導してメディーナに到着した。彼は使徒ムハンマドに忠誠を誓い、クルアーンとイスラーム教徒の務めと守るべき掟としてのシャリーア（イスラーム法）を学んだのであった。使徒は12ウキア（重量単位：エルサレムで1ウキア=240g）をファルワに下賜した。更に使徒はファルワにオマーン織りの生地で作らせた衣服を分け与えた他、ムラード、ズバイド（と読む）、マズハジュの各地方を治めさせた。サダカを回収する努めの為に、使徒はファルワと共にハーリド・ブン・サイード・ブン・アルアースを派遣すると共に、ザカートの義務を明文化した書簡を送った。

ファルワ・ブン・マスフィークが訪ねて来たときに、使徒はこう尋ねた。「ファルワよ、ラザムの日に、汝ら一族に及んだ災難の事で頭が痛いのではないか。」これに対してファルワはこう答えた。「ラザムの日に、我が一族はとんだ災難を被りましたが、こんな酷い目に遭いながら頭を抱えない者はおりますまい。」使徒は続けてこう言った。「だがな、真に汝の一族は（かくも苦しんだが故に）イスラームにおいて善いことを一層多く行ったのだ」

ラザムの日とは、世に良くよく知られた日のことで、その日にハムダーンとムラードの両部族間で決闘が行われたのだった。この日ハムダーンによりムラード側はジャウフの地から追い出され、それ以降一族が地盤を固めることになった今日の場所にやって来たのだった。そこはジャウバー帯でムラード族の地として知られるようになっていた。

ズバイドからはアマル・ブン・マアディカルブ・アルズバイディーが使徒のもとへやって来た。彼は一族を引き連れてやって来て、全員がイスラームを受け入れた。マズハジュからはアンス・マズハジュ一行が来訪し、同じく全員イスラームを表明した。彼らの中にラビーアと言う名の人物がおり、恐らく彼が一行の長であったとみられる。この人物はアッラーの使徒と夕食を共にし、自らイスラームへの改宗を告白した。この時、使徒は尋ねた。「貴方は望んでここに来たのか、それとも恐る恐るやって来たのか」。

男（ラビーア）はこう答えた。「望んでと言えば、（私のここへ来た理由は）アッラーに誓って申し上げるが、使徒の御手には富が無いので（金品に目が眩んでやって来たのではないのです）。また畏れる気持ちと云えば（もし本当に恐ろしければ）、アッラーに誓って申し上げるが、使徒の軍隊が攻め入れない（程遠くの）地に私は住んでいたことでしょう。こう申し上げるのも私が（アッラーのことを）畏れているからで、本当に畏れる気持ちで一杯なのです。アッラーを信じよ、と仰せになられたので、私は信じるようになったのです」

第1～2章 「イエメン概説史」第2巻[イスラーム史]P. 5—21 翻訳